

「忘れた」と「忘れていた」の 使い分けに関する指導上の留意点

— 思い出した際の反応としての発話を中心に

陳 昭心

◆要旨

本稿では、「忘れた」と「忘れていた」の使い分けについて検討した。母語話者は「忘れていた」の意味を「思い出した」と説明しているようであるが、その説明をする前に、忘れる対象がモノなのかコトなのかを区別する必要がある。本稿では、まず、台湾人学習者がモノを忘れるかコトを忘れるかを区別しない可能性があるということを、質問紙調査を通して示した。そこから、学習者に説明する際には、母語話者との前提が異なることを注意しなければならないということが明らかになった。また、「忘れる」という動詞に関するテンス・アスペクトの運用上の手掛かりとして、「忘れる」対象のほか、自己申告か相手による想起かという違い、想起のタイミング、時間副詞との共起、といったことが指摘された。

◆キーワード

忘れた、忘れていた、忘れ物、
想起のタイミング、相手による想起

◆ABSTRACT

Wasurete-ita" is explained as meaning "recalling," by Japanese native speakers.

However, the explanation should be used only after distinguishing what is forgotten.

In this paper, it was shown that there was a possibility of not distinguishing what is forgotten with the learners through the questionnaire investigation. Thus, it was suggested to have to notice that learners and the native speakers might have different assumptions when we explain grammar. Moreover, it was mentioned that we could choose "wasure-ta" or "wasurete-ita" according to some hints, such as reminders, timing of recalling, and the usage of time-adverbs such as "kinoo" and "sakki."

◆KEY WORDS

wasure-ta, wasurete-ita, wasuremono,
timing of recalling, reminder

Explanations of the Usage of
Wasure-ta and *Wasurete-ita*
Focusing on the situations that recalling
something
CHEN JAUSHIN

1 はじめに

日本語学習者に次のような誤用が観察される。

- (1) (自転車を移動させようと思ったら、動かなくて)
留学生：「忘れた〜」(→忘れてた) (と、チェーンを外す) <台湾>
- (2) (「今日は好きなドラマの放送日だった」と思い出して)
留学生：「忘れた」(→忘れてた) (と、素早く帰宅する) <韓国>
- (3) (壇ノ浦の戦いで海に沈んだ天皇の名前を思い出せなくて)
留学生：「ああ、忘れてた〜」(→忘れた) <インドネシア>

例(1)の場面では、話し手が「チェーンを外す」ことを思い出したため、「忘れた」ではなく「忘れていた」を使用すべきであろう。「忘れた」と言った後、自転車のチェーンを外すという流れが不自然なのではないだろうか。例(2)の場面でも、今日は放送日であることを思い出したため、「忘れた」ではなく「忘れていた」を使用すべきである。それに対して、例(3)では、話し手が壇ノ浦の戦いで海に沈んだ天皇の名前を思い出せなくて、すなわち、記憶から取り出せない状態にあり、「忘れていた」ではなく「忘れた」を使用すべきである。

上記のような誤用は、稀に観察される用例ではない。谷口(1993)では、次のように誤用例と説明が記述されている。

日本人学生(チューター) A: ほかに何かわからないことがありますか?
留学生 B: いえ、あっ、はい。(と鞆の中から書類を取り出して) これ、あなたに渡すのを忘れました。

このような場合、話し手Bの意識としては、その書類を相手Aに渡さなければならぬということをいま思い出したわけであるから、正しくは、下線部は「忘れていました」とテイル形にすべきであろう。それを上のように「忘れました」とル形にしてしまうと、本当にそのことを忘れてしま

い、その件はもう終わってしまった、といった反対の意味になってしまう。このような場合にも、テイル形で、話し手がある出来事をいま思い出した、といった気持ちを表わすものと考えられる。(谷口 1993: 29)

谷口(1993)の記述をまとめると、すなわち、「忘れていた」は「思い出し」の意味を表し、「忘れた」は「すべきことをしなかった」という反対の意味を表す、ということになる。話し手は「今渡した」という状況であるため「渡すのを忘れていました」と言うべきである。逆に、「渡すのを忘れました」と言うと、「結局渡さなかった」という反対の状況になるのである。

「忘れた」と「忘れていた」のように、「〜タ」と「〜テイタ」が反対の状況を表すことは、他には例えば「思った(以来、そのような考え方でいる)」と「思っていた(が、今はそう思わない)」、「壊れた(その結果が残っている)」と「壊れていた(が、今は直っている)」などが挙げられる。「忘れる」のような変化の結果が残存する動詞の「〜タ」は変化が起こったことを表し、その後状態変更の表現がなければ、変化の結果が今も残存していることとして理解されるのが普通である。それに対して、「〜テイタ」の形であれば、「過去の状態」を表すため、「その後、状態が回復したことが含意されることもある」(日本語記述文法研究会 2007: 30)とされており、説明例として「おお、忘れていた。(今、思い出した)」と記述されている。さらに、例(3)のような「思い出せない状態」も、「思い出した状態」とは反対の意味になっていると言えよう。

また、日本人学習者向けの中国語の文法の説明書である荒川(2003)にも、中国語の「我忘了」の用法を言及したところに、日本語の「忘れていた」は思い出したときに言う言葉であり、実質は「思い出した」ということであると言及されている。同書によると、日本語では「忘れていた」と言うべきところにも、「忘れた」と言うべきところにも、中国語ではよく同じく「我忘了」という形式を使用するという。確かに、「忘れた」と「忘れていた」は使用場面が異なるようであるが、中国語では、例(1)～例(3)において全部同一形式の「我忘了」と言うことが可能であると考えられる。すなわち、中国語では「我忘了」という形式で日本語の「忘れた」と「忘れていた」をカバーできるというわけである。このことから、中国語母語話者にとって、「忘れた」と「忘れ

ていた」の使用場面の「違い」は意識されにくいのではないかと考えられる^[註1]。

上記の日本語学習者向けと、中国語学習者向けの両者の説明において、「忘れていた」は「思い出し」を意味することが挙げられている。だが、これは日本語母語話者の発想に基づく説明であり、日本語学習者に説明する際には不十分であると言える。なぜなら、次のように、「忘れ物」を思い出した場合でも「忘れた」を使用する例が観察されるためである。

(4) (琴子が同級生と一緒に音楽教室から教室へ戻る途中……)

琴子：(その同級生が持っている笛を見かけて、あっ笛!と)「笛忘れたっ」
(と言って音楽教室へ折り返す)

(『銀色のハーモニー』①、p.46より、下線筆者)

(5) まる子：(出かけようとしたとき)「あ…ヨーヨー忘れた」(と言ってヨーヨーを取りに行く) (『ちびまる子ちゃん』②、p.203より、下線筆者)

このように、「忘れ物」を思い出した際に「忘れた」という形式を使用することもあるため、「忘れていた」が意味する「思い出し」は、例(1)や例(2)のようなコトの場合における説明なのではないかと考えられる。すなわち、日本語母語話者のなかに、モノを忘れるかコトを忘れるかを区別するという前提があるようである。しかし、日本語学習者にも同じような前提があるのだろうか。

本稿では、まず、日本語母語話者と学習者が忘れる対象を区別するか否かを示すことを通して、学習者に文法説明をする際に注意しなければならないことを指摘する。また、コトを思い出した場合にも「忘れていた」を使用せずに、「忘れた」を使用することもあるということを含めて、「忘れた」と「忘れていた」の使い分けを検討し、指導上の留意点を挙げる。

なお、本稿では、「忘れていた」の代わりに、「忘れてた」と表記することがある。日常会話では、思い出した際に「忘れていた」よりも「忘れてた」のほうがよく使用されるためである。

2 「忘れる」対象の区別

2.1 学習者が「忘れる」対象を区別するのか

先にも述べたが、日本語母語話者の中では、モノを忘れるかコトを忘れるかを区別するという前提があるようである。しかし、日本語学習者にも同じような前提があるのだろうか。

次に、日本語母語話者と台湾人日本語学習者を対象とした質問紙調査の結果を提示し、このことについて検討する。

2.2 質問紙調査の概要

調査対象者は、日本語母語話者143名と台湾人日本語学習者120名であった。日本語母語話者には2008年6月に、台湾人日本語学習者には2007年5～6月に調査を行った。

調査の内容は、設定した場面で「忘れる」という動詞を使用させることである^[註2]。調査方法は質問紙法である。日本語母語話者の回答は方言もあったが、その場合は標準語に変換し計数することにした。日本語母語話者143名の中で、3名が「忘れる」という動詞を使用していなかったりしたため、この3名の回答が除外された。そこで、日本語母語話者140名と台湾人日本語学習者120名の回答を検討することにした。

2.3 調査内容とその結果

具体的な内容と調査結果は次のようにまとめられる^[註3]。なお、本稿では、「忘れてしまった」という回答を「忘れた」と見なして計数することにした。

説明：次の場面で、あなたは何と言いますか？【 】の中に提示された動詞を使って文を完成させてください。

場面

あなたは友達と約束して、朝9時に学校で来週の発表の話し合いをするこ

とになっていました。しかし、あなたは9時10分に気がつきました。

あなた（独り言）：「あっ、_____【忘れる】」①

あなたはその友達に電話してから、急いで出かけました。学校に行く途中で話し合いの資料を持ってこなかったのに気がつきました。

あなた（独り言）：「あっ、_____【忘れる】」②

あなたは家に戻って、資料を取ってきました。そして急いで待ち合わせの場所に行きました。

友達：「大変だったでしょ？」

あなた：「大変だったよ。急いで出かけて、そして資料を取りに戻って、また急いで……あっ！」

友達：「どうしたの？」

あなた：「戻ってまた出かけたとき、かぎをかけるのを_____【忘れる】」③

表1 発話①の結果

発話①	J (140名)	S全体 (120名)			
		1～3級 (120名)	1級 (33名)	2級 (52名)	3級 (35名)
忘れた	2 (1.4%)	111 (92.5%)	31 (93.9%)	50 (96.2%)	30 (85.7%)
忘れてた	138 (98.6%) ^[注4]	1 (0.8%)	1 (3.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
その他	0 (0.0%)	8 (6.7%)	1 (3.0%)	2 (3.8%)	5 (14.3%)

表2 発話②の結果

発話②	J (140名)	S全体 (120名)			
		1～3級 (120名)	1級 (33名)	2級 (52名)	3級 (35名)
忘れた	117 (83.6%) ^[注5]	110 (91.7%)	32 (97.0%)	45 (86.5%)	33 (94.3%)
忘れてた	8 (5.7%)	3 (2.5%)	1 (3.0%)	1 (1.9%)	1 (2.9%)
忘れてる	3 (2.1%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
忘れてきた	10 (7.1%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
その他	2 (1.4%)	7 (5.8%)	0 (0.0%)	6 (11.5%)	1 (2.9%)

表3 発話③の結果

発話③	J (140名)	S全体 (120名)			
		1～3級 (120名)	1級 (33名)	2級 (52名)	3級 (35名)
忘れた	95 (67.9%) ^[注6]	108 (90.0%)	29 (87.9%)	49 (94.2%)	30 (85.7%)
忘れてた	28 (20.0%)	5 (4.2%)	3 (9.1%)	1 (1.9%)	1 (2.9%)
忘れてる	1 (0.7%)	1 (0.8%)	1 (3.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
忘れてきた	15 (10.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
その他	1 (0.7%) ^[注7]	6 (5.0%)	0 (0.0%)	2 (3.8%)	4 (11.4%)

2.4 母語話者と学習者による異なった前提

表1～表3から、日本語母語話者が発話①ではほぼ全員が「忘れてた」、発話②では「忘れた」を選択しているのに対し、発話③では「忘れた」(67.9%)、「忘れてた」(20.0%)の割合で選択が分かれていることがわかった。一方、学習者は①～③のどれでもほぼ全員が「忘れた」を使用していた。

発話③には①や②と違い「戻ってまた出かけたとき」という「とき節」があることが、「忘れる」形式の選択が母語話者において割れたことに関与している可能性がある。しかしながら、紙幅の都合上、発話③の分析については今後の課題とし、本稿では比較的母語話者の選択が一致している①と②に焦点を置くことにする。

発話①は、約束を思い出した際の発話である。発話①において、日本語母語話者は「忘れてた」を使用する傾向があるが、台湾人日本語学習者は「忘れた」を使用する傾向が見られた。一方、忘れ物を思い出した際の発話である発話②では、日本語母語話者も台湾人日本語学習者も「忘れた」を使用する傾向が観察された。このように、日本語母語話者はモノを忘れるかコトを忘れるかにより使用する形式を区別しているのに対し、台湾人日本語学習者はそれを区別していないことがうかがえる。より多様な学習者の調査が望まれるが、上記の調査結果から台湾人学習者にはそのような傾向があると言えよう。

以上のことから、次のようなことが考えられる。すなわち、日本語母語話者がモノかコトかを区別するのを無意識の前提として、「忘れた」と「忘れてた」

を使い分けているのにもかかわらず、台湾人学習者はモノを忘れるかコトを忘れるかを区別すべきであるとは思っていないのかもしれない。日本語母語話者が無意識的にモノかコトかを区別しているという前提で、谷口(1993)や荒川(2003)の説明が挙げられているのではないかと考えられる。つまり、「忘れてた」が「思い出した」を意味するということは、コトの場合のみを指し、最初から「忘れ物を思い出した」とは異なる次元に置かれているのである。

しかし、学習者がモノかコトかを区別しない限りでは、「思い出した」という説明を与えても、納得させることができないのではないだろうか。そのため、指導する際に、学習者にモノを忘れるかコトを忘れるかを意識させることが必要になってくると言えよう。

2.5 忘れる対象を表現するのに関わる語用論的な要因

先述のように、モノを忘れる場合とコトを忘れる場合を区別しなければならないという原則があるのである。しかし、場面によって、忘れ物を表現すべきかコトを表現すべきかも考えなければならない。次の例をご覧ください。

(6) 「昨日貸してくれるって言ってた、CD持って来た？」

「あ、すっかり忘れてた！ごめん～明日必ず持って来るねー」

(<http://www.k-plaza.com/Korean/hitokoto/200401/20040113.html>)

アクセス日付2010/06/29 韓国語の部分を省略)

例(6)のように、結果的に「忘れ物」になるとしても、「忘れてた」が使用されることがある。これは、「忘れ物」であるかのように見えるが、「言われてみれば、確かに貸してあげることを約束してた」と言うつもりで「コトを忘れる」こととして扱われるのではないかと思われる^[註8]。このように、相手による想起の場合は、よく「忘れ物」を言うより「コトを思い出した」ことを表現する。次の例(7)と例(8)も、結果的に「忘れ物」になるが、「コトを思い出した」ことを表現している。

(7) まる子：「えっ 体操着!? 持ってないよ 今日体育の授業あったっけ？」

たまちゃん：「体育の授業はないけど 運動会の練習が放課後あるんだよ 大野君と杉山君が指導するって…」

まる子：「しまった 忘れてたよ どうしよう」

たまちゃん：「体操着忘れたなんて言ったら大野君と杉山君に怒られちゃうね…」 (『ちびまる子ちゃん』⑧、p.52より、下線筆者)

(8) 前田：「今から 尿けんさの尿を集めます 全員持ってきた尿を提出してください」

まる子(心内発話)：「しまった 尿けんさ忘れてた」

たまちゃん：「まるちゃん その顔はもはや… オシッコ持ってくるの忘れたねっ」(『ちびまる子ちゃん』⑧、pp.59-60より、下線筆者)

それに対して、上の例のように話し相手から何かすべき行為があったことを指摘されて思い出す場合ではなく、例(9)のように、話し手自らがすべき行為を失念していたのに気付いて述べた場合は、「忘れた」を使用し相手に伝えることが観察されている。

(9) ワット：昔「上手な整理の方法」という本を書いたことがあるんです。

大学職員：へえ、すごいですね。

ワット：あまり売れませんでしたけどね。

よかったら、1冊持って来ましょうか。

大学職員：おはようございます。

ワット：あ、本を持って来るのを忘れました。

すみません。

大学職員：いいですよ。でも、回覧にはんこを押すのを忘れないでください。先月も押してありませんでしたよ。

(『みんなの日本語初級II本冊』p.103より、下線筆者)

このように、忘れ物を表現すべきかコトを表現すべきかは、自己申告か相手による想起かという違いに影響されると考えられる^[註9]。

3 コトを思い出した場合における「忘れた」の使用

3.1 想起のタイミング

先述のように、コトを思い出した場合は「忘れてた」を使用する。だが、次の例(10)と例(11)のように、コトを思い出した場合でも「忘れた」の使用が観察される。

(10) (クリスマスの教会公演。あわててステージに上がったら)

まる子(内心発話):「はっ しまった マリア様なのにズボンぬぐの忘れた」 (『ちびまる子ちゃん』⑥, p.23より、下線筆者)

(11) (料理を作っている最中)

みさえ(独り言):「あっ、ひき肉と大根買うの忘れた」 (『クレヨンしんちゃん』①, p.1より、下線筆者)

(12) (初詣の場面で)

まる子:「あっ まる子も何かお祈りしなきゃね ええと……みんな元気でくらすませよう…」

おじいさん:「ムニャムニャ…」

(初詣が終わった後)

おじいさん:「しまった 株が上がるように祈るのを忘れたよ」 (『ちびまる子ちゃん 大野君と杉山君』p.106より、下線筆者)

「ズボンをぬぐコト」や「ひき肉と大根を買うコト」や「祈るコト」が、コトを思い出すと見なされるのであれば、「忘れてた」を使用してもよさそうであるが、上の例のように「忘れた」が使用されている。その理由は、思い出した時点にはすでにすべきだったことが挽回しにくくなっており、もはや「前段階を一段落させた」ということにあると考えられる。

例(10)では、思い出した時点にはすでにステージに上がっており、もはや楽屋での準備段階を一段落させている。楽屋での準備段階(例えば、ステージに

上がるまでの時間帯)が想起すべきだった有効期間であり、有効期間内に思い出せば、「忘れてた」を使用することになるだろう。例(11)でも、思い出した時点にはすでにスーパーにおらず、もはや買い物段階を一段落させていたため、「忘れた」が使用されている。買い物段階(例えば、スーパーを出るまでの時間帯)が想起すべきだった有効期間であり、有効期間内に思い出せば、「忘れてた」を使用することになると思われる。例(12)でも、思い出した時点にはすでに神社を出ており、もはや初詣の段階を一段落させていたため、「忘れた」が使用されている。初詣の段階(例えば、神社を出るまでの時間帯)が想起すべきだった有効期間であり、有効期間内に思い出せば、「忘れてた」を使用することになると思われる。

このように、「想起」のタイミングによって使用形式が違うように思われる。次の2例もそのことを示す。

(13) 女性:よし、小麦粉を入れてから、卵の白身と混ぜ合わせるのね。でも、何か変だわ。たぶん材料の1つを入れ忘れたのね。あっ、そうだ。お砂糖を忘れた。

(『岩村圭南の1分間英語 リスニング編』p.209より、下線筆者)

(14) 雲龍:「ごちそうさま……」

ダーニャ:「もう?」

雲龍:「もうおなかいっぱい」

ダーニャ:「ひと口で!?最高にダイエット!?!」

のだめ:「あー味付け忘れました!!」(と言って)「おしょうゆかけて食べるセトレボン(おいしい)」(と言いながら醤油をかけている)

(『のだめカンタービレ』⑩, p.114より、下線筆者)

例(13)のように、料理の途中で思い出した場合は、「忘れてた」が使用されている。それに対して、例(14)では、料理の段階がすでに一段落しているため、「忘れた」の使用になるのではないだろうか。

このように、「想起」のタイミングが挽回の「有効期間」終了後にある場合は、コトを思い出しても「忘れた」が使用されるのである。

3.2 挽回の「有効期間」として捉えられやすい文脈

では、なぜ「想起」のタイミングが挽回の「有効期間」内か否かによって、表現形式が変わるのだろうか。その理由は、一般に「～タ」を使用するか「～テイタ」を使用するか^[註10]の原理にあると言えよう。過去の事象を「1つのまとまり」として捉える場合は、「～タ」を使用する^[註10]。一般的に、「有効期間」が切れると、母語話者のなかにそのコトを「一段落」させるように取り扱いやすいのではないと思われる。そのため、コトをいわゆる「1つのまとまり」として捉え、タ形を使用するのである。「忘れてた」の「テイタ」は状態であるため、「1つのまとまり」ではない。このように、話し手が事象を「1つのまとまり」として捉えるかどうかということによるわけである^[註11]。

ただし、「有効期間」というのは、絶対的な「締め切り」とは別な概念であり、上記のような料理や買い物など「進展過程の1つの区切り」や「1つの段階」として捉えられやすいタスクにおいて、意識されやすいようである。例(10)では、「ズボンをぬぐ」ことは楽屋での準備段階でのタスクであり、演出段階でのタスクではない。例(11)では、「ひき肉と大根を買う」ことは買い物段階でのタスクであり、料理の段階でのタスクではない。例(12)では、「祈る」ことは初詣の段階でのタスクであり、例(14)でも、「味付けをする」ことは料理の段階でのタスクである。これらのような「段階」が完了した後に思い出した場合は「忘れた」の使用が観察されやすいのである。

3.3 時間副詞との共起

「忘れた」と「忘れてた」を使い分ける際に、時間副詞との共起による影響も見られる。次の3例を比べよう。

(15) (ブログの記事)

昨日…

締め切りだった卒業研究のレジュメを、提出するのを忘れました。

(<http://blog.livedoor.jp/cerise880516/archives/2010-05.html>)

アクセス日付 2010/11/26 絵文字を省略

(16) (独り言)「これ昨日出すの忘れてた。まっ、いいか」

(『朝から夜まで絵でみるひとりごと英会話』、p.47より、英語を省略、下線筆者)

(17) 「すみません。これさっき出すのを忘れました」(と言ってアンケート用紙を出す)
(実例、下線筆者)

例(15)における「忘れた」の使用は、発話時の「今」と切り離れた「昨日」のことに對して結論をつけるような形式である。それに対して、例(16)では、「昨日」を明言していても実際「昨日から今までずっと忘れていた」という意味を表している。締め切りのない書類を出すのはもちろん、仮に書類提出の締め切りは「昨日」であったとしても、「忘れた」より「忘れてた」の方が言いやすいと思われる。一方、例(17)のような「さっき」と共起する場合は、「忘れてた」よりも「忘れた」の方が適切であろう。もし「さっき」がなければ、例(17)では「忘れてた」を使用しなければならなくなるのである。

このように、「忘れる」という動詞は「昨日」や「さっき」のような時間副詞と共起することがよくある。より多様な言語と比較する必要もあるが、中国語の場合は、「昨天」(昨日)も「刚才」(さっき)も同一形式「忘了」と共起するため、日本語の時間副詞との関わりが把握しにくいかもしれない。学習者が例(15)～(17)のような用例に触れる機会は少なくないため、時間副詞との共起による影響も説明しておかなければ、混乱を招く原因になるのではないだろうか。

4 おわりに

本稿では「忘れた」と「忘れていた」の使い分けに関する指導上の留意点として、まず、忘れる対象の違いを意識させることの重要性を挙げた。原則として忘れ物の場合は「忘れた」を、コトを思い出した場合は「忘れてた」を使用するが、自己申告か相手による想起かの違いや、「想起」のタイミング、時間副詞による影響も使い分けの手掛かりになる。

「タ」と「テイタ」の使い分けは、そもそも学習者にとって難しいテンス・アスペクトに関する問題である。特に、「忘れる」対象によってアスペクトの

捉え方が異なるため、一層複雑になる。本稿は、単一動詞に限るが、日本語の時間体系に戸惑う学習者に対して、テンス・アスペクトの運用上の手掛かりを示した。

しかし、本稿で検討した用例は、思い出した際の反応としての発話に限られた。テンス・アスペクトの体系を全面的に把握するために、本稿では分析しなかった発話③などを含めて、さらなる各文脈の用例を観察しなければならない。また、自分の忘れ物を思い出したときは「～を忘れた」を使用するが、他人に忘れ物を注意するときは「～を忘れてるよ」の使用が観察される^[注12]。したがって、「忘れる」という動詞の性質をより吟味する必要があるため、この点については、今後の課題としたい。

〈仏教慈済大学〉

〈付記〉

本稿は、2010世界日本語教育大会において発表したものに加筆・修正したものである。

注

- [注1] …… 学習言語が母語より複雑に分化している場合は習得が比較的難しいという可能性があることについて、渋谷(2001)を参照されたい。また、例(2)と例(3)のような中国語母語話者ではない日本語学習者による不適切な使用も観察されているため、「忘れた」と「忘れていた」の使い分けはどの母語の日本語学習者にとっても難しい可能性が考えられる。
- [注2] …… 学習者用の調査用紙は、他の調査と同じ用紙で調査を行ったため、全部で23場面あり、動詞「忘れる」を使用するのは3つの発話から構成された1場面であった。母語話者用の調査用紙は、「忘れる」を使用する3つの発話から構成された1場面のみであった。
- [注3] …… 提示の便宜のため、3つの発話をそれぞれ①、②、③と表記する。表中にあるJは日本語母語話者を指し、Sは中国語を母語とする台湾人日本語学習者を指す。1級～3級は日本語能力試験の合格級である。
- [注4] …… 138名の中で、3名が「約束(を)忘れた」を、1名が「話し合いをするのを忘れた」を、1名が「話し合いがあるのを忘れた」を、1名が「行く

の忘れてた」を使用している。

- [注5] …… 117名の中で、8名が「資料(を)忘れた」を、3名が「持ってくるの(を)忘れた」を、17名が「忘れてしまった」を使用している。
- [注6] …… 95名の中で、4名が「忘れたかも」を、25名が「忘れてしまった」を使用している。
- [注7] …… 1名が「忘れてきてしまった」を使用している。
- [注8] …… 副詞「すっかり」の使用もその意味を表すと見えよう。
- [注9] …… 白川(1999)では、「忘れていました」は「等於「今思い出しました」(筆者訳:「今思い出しました」と等しい)とされ、前者は「経別人提出而想起」(筆者訳:相手が言い出すことによって想起される)、後者は「自己想起来」(筆者訳:自分が思い出す)とある。すなわち、「忘れてた」と「思い出した」の使い分けについての説明である。しかし、「自分が思い出した」場合であっても、「忘れてた」の使用が観察されることから、本稿では「自己申告」か「相手による想起」かの違いで「忘れた」と「忘れてた」の使い分けを論述することにした。
- [注10] …… 国立国語研究所(1985)などを参照されたい。
- [注11] …… このような「1つのまとまり」としての捉え方は、日本語のアスペクト・テンス体系において極めて普通でありながらも重要なようである。しかし、学習者にとっては、おそらく日本語の時間体系は必ずしも「当たり前」の存在とは限らないだろう。次の学習者の使用例にもその捉え方の把握しにくさが見られるように思われる。
- 【例】(発表の後)
- 留学生A:「どうでしたか?」
- 留学生B:「緊張していました。」 〈台湾〉
- 日本語母語話者であれば、普通「緊張した」のようなタ形を使用するだろう。母語話者は発表の後で一段落として区切りし、発表の全過程で緊張が続いたとしても、「1つのまとまり」として捉え「緊張した」を使用するわけである。
- [注12] …… 例えば、次の2例は、他人に忘れ物を注意するときの発話である。
- 【例】母:「まる子 プレゼント忘れてるよ」
(『ちびまる子ちゃん』①、p.55より、下線筆者)

- 【例】まる子:「もう行くよ」
母:「ホラホラ 白い布忘れてるよ」
(『ちびまる子ちゃん』④、p.121より、下線筆者)

参考文献

- 荒川清秀(2003)『一步すすんだ中国語文法』大修館書店
- 国立国語研究所(1985)『現代日本語のアスペクトとテンス』(高橋太郎著)秀英出版
- 渋谷勝己(2001)「第5章 学習者の母語の影響—学習者の母語が影響する場合としない場合がある」野田尚史・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子(共著)『日本語学習者の

文法習得』pp.83-99. 大修館書店
白川秀明 (1999) 『中國人學日語易錯之處 上冊』豪風出版
谷口秀治 (1993) 「テイル形とムードに関する一考察」広島大学大学院教育学研究科修士論文
日本語記述文法研究会 (2007) 『現代日本語文法3 テンス・アスペクト・肯否』くろしお出版

【用例出典】

『朝から夜まで絵でみるひとりごと英会話』明日香出版社

『岩村圭南の1分間英語 リスニング編』アルク

『銀色のハーモニー』① 集英社文庫

『クレヨンしんちゃん』① 双葉社

『ちびまる子ちゃん』①②④⑥⑧ 集英社文庫

『ちびまる子ちゃん 大野君と杉山君』集英社

『のだめカンタービレ』⑩ 講談社

『みんなの日本語初級Ⅱ本冊』スリーエーネットワーク

<http://blog.livedoor.jp/cerise880516/archives/2010-05.html> (2010年11月26日参照)

<http://www.k-plaza.com/Korean/hitokoto/200401/20040113.html> (2010年6月29日参照)